

# 模図かずお『イアラ』における典拠と出来事

高橋 明彦

## 1、はじめに、典拠の指摘

不愉快な指摘。藪をつついて蛇を出すの類。そうではなく、単純に男の時間と女の時間、瞬間と永遠といった話題<sup>1</sup>をシンプルに論じているほうが居心地はよからう。

一九七〇年作品『イアラ』<sup>2</sup>は、歴史に取材した作品である。そのため、あまり意識せずに読んでみると、もちろんフィクションの部分もあるのだけれどおおよそ史実を踏まえているのでは、という印象を受けるだろう。例えば、奈良の大仏建立の時ひとりの女性が生贄になったというのはフィクションだろうが、大仏建立自体は史実である、と。あるいは、芭蕉と旅をした曾良が土麻呂であったというのはフィクションだろうが、芭蕉の旅自体は史実である、などと。『イアラ』は歴史ものの常として、虚実入り混じって作品化されている。

一般に、史実のまま描かれている部分を取材と称し、フィクション化されている部分を作者の趣向などと考えるのがふつうである。そして、取材と趣向とをいかに絡ませ作品化するかが、作者の妙味とされる。国文学研究などで行われる典拠論は、おおよそこの前提に立っている。

本稿もとりあえずこの前提に立って、『イアラ』の虚と実とを分別していこうと思う。このやり方に就いてあらかじめ二点を挙げれば、ひと

つにはまず典拠を指摘することで作品理解も深まる、ということが言えるだろう。しかしもうひとつには、上述の前提自体が間違っているのかも知れないということも、除々に明らかになるのではないか。

『イアラ』は全七話から成る。以下、この典拠の問題を中心に、とりあえずいくつかの話について注釈を施していこうと思う。

## 2、大仏造建

『イアラ』第一話「さなめ」は奈良時代が舞台である。東大寺毘盧舎那仏の造営という史実にそって、主人公たる土麻呂つちまろと小菜女さなめの二人の男女の出合いがここで描かれる<sup>3</sup>。大仏造営のため徴用された奴婢の土麻呂の後を追って、幼なじみの小菜女も奈良の都に上る。土麻呂に逢えず工匠国中公麻呂の庇護下におかれた小菜女は、大仏が完成する鑄造の最終段階で人身御供として大仏の溶銅に鑄込まれるのである。鑄込まれる瞬間、群集の中に土麻呂を見つけた小菜女は彼に向かって「イアラ」と絶叫する。それは土麻呂にとって謎の言葉となった。

さて、典拠の指摘として、東大寺建立に関する部分を指摘しておこう。同時に、物語の叙事的な面についても、典拠の指摘ができる。

例えば、本話末尾のナレーションには次のようにある。

こうして八度の鑄直しをし、十年の歳月をへて天平勝宝元年に大仏は完成した。そして建立にさいし熱銅七十三万九千五百六十斤、炭一万八千六百五十六石、及び水銀、練金など、莫大な量にのぼる。その他何千人という人員がたずさわった。(41頁)

ここには数値が具体的に列記されている。すなわち、八度の鑄直し、十年の歳月、天平勝宝元年、熱銅七十三万九千五百六十斤、炭一万八千六百五十六石、何千人という人員。

この数値については、原拠は『続日本紀』『東大寺要略』などが考えられるが、ここでは『扶桑略記』<sup>4</sup>を抄出しておく。

(天平十五・七四三年) 十月十五日、近江国信楽京(滋賀県甲賀市信楽町)に於いて、東大寺盧舍那仏金銅像を創り奉る。太政官知識文に、「大願を發舉して、盧舍那仏金銅像一体を造り奉る。国の銅を尽して像を鑄る。大山を削りて以て堂を構ふ。……」

(天平十六・七四四年) 十一月壬申(十三)日、甲賀寺、始めて盧舍那仏像の体骨柱を建つる。(聖武)天皇、親臨し、手ずから其の繩を引く。

(天平十七・七四五年) 八月廿三日、大和国添上郡に於いて、更に東大寺大仏を創り奉る。天皇、専ら御袖を以て土を容れ、持ち運び、御座に加ふ。然る後に氏々諸人を召し集めて、土を運ばせ御座を築堅す。

(天平十九・七四七年) 丁亥九月廿九日、始めて東大寺大仏を鑄奉る。

(天平勝宝一・七四九年) 同(七)月廿四日、東大寺大仏を鑄奉り、すでに畢ぬ。三ヶ年間、八ヶ度、大仏を鑄奉る。大仏師從四位下国大麿

大鑄師從五位下高市真国、從五位下高市六麿、從五位下柿本男玉、……或説に云わく、……御体金銅盧舍那仏像一体を鑄奉るに、……熱銅七十三万九千五百六十斤、白銀一万二千六百十八斤、練金一万四百四十六兩、水銀五万八千六百廿兩、炭一万八千六百五十六石を用ゆ。

(天平勝宝・七五二) 四年三月十四日、東大寺大仏、金を塗り奉る。四

月九日乙酉、東大寺金を未だ塗り畢らざる間、大会を設け、供養す。

さて、大仏造営にかかる数値は、『扶桑略記』の記事と一致する。なお、この資料によって「熱銅」ではなく「熟銅」「精鍊された銅。上吹銅とも」であるべきだということも分かる。

作者の模図かずおは、しかしこうした一次史料から直接引用したのではなく、『イアラ』執筆時に既に刊行されていた歴史関係の書物から、それらの情報を利用していただけと思われる。その書物は一九五九年・読売新聞社刊『日本の歴史』全12巻である<sup>5</sup>。このうち、第2巻「飛鳥と奈良」が、本話の直接の典拠として利用されたと思しい。

以下、該当部分を煩をいとわず長めに引用しておく。本話の他の部分の典拠でもあるからである。ゴチックで示した部分が見出しである。『イアラ』の参考にされなかった部分は省略した旨を適宜示したが、第2巻のうち、第7章「聖武天皇と東大寺」第2節「国分寺と東大寺」から連続した部分である。また、論述のために①以下の数字を附した。

#### ①大仏造建の発願

国分寺の造営の事業をすすめていく間に、天平十五年(七四三)七月、聖武天皇は恭仁京から紫香楽しからきに行幸し、ここで十月、盧舍那仏を造る詔を出した。国司にまかせていた国分寺造営が進まないのをみた天皇は、そのころ対立していた諸勢力——皇族と貴族、貴族と僧、貴族内部における藤原氏と橘・大伴・佐伯氏のグループ——などの緊張をやらわげ、人心を集中させる新たな事業として、大仏造営を企てたのだろう。

#### ②民力に期待(全略)

#### ③墾田の永世私有を認める(前略)

こうして、十六年十一月につくりはじめた甲賀(滋賀県)での大仏造建の進行は中絶してしまった。なにしろこんな大きな仕事に狩り出される民衆は膨大な数である。

すべての人が快くついてくるものではない。反感もずいぶん強く逃げ出すものもいて、容易なことではできなかったのである。

④カワラに名をかきつけた人々（全略）

⑤板ぶきの宮殿（全略）

⑥貴重なカワラ（全略）

⑦和泉大野寺の土塔（全略）

⑧大仏をなぜつくったか

このようにしてまで、大仏を造営した動機について、歴史学者、辻善之助は次のようにいう。一つは、中国の影響が考えられる。当時の唐には龍門の泰光寺に十丈の大日如来（盧舎那仏）がつくられており、天平二年に相当する開元十八年（七三〇）には、弥勒の石像の三百六十尺のものがつくられた。中国に対するいわば対抗意識がひそんでいたともみられる。（後略）

⑨大仏づくり再開

いったん中絶した大仏の造営は、天皇が平城京へ帰ってきた天平十七年（七四五）、平城京の東の金鐘寺の地で再開した。八月に、天皇をはじめ皇后・官人は土を運び大仏の座をつき固めた。天皇は、そのそでに土をいれて運んだなどといわれている。鑄造がはじまったのは十九年（七四七）九月で、たびたび鑄損じて、八度目に成功した。この大仏ほど巨像となると、鑄造技術もひじょうにむずかしかったから、すぐれた技術者を、身分をとわずに民間から探さなくてはならなかった。齋明朝に百濟からきかして大和の国中村に住んでいた国骨富の子孫、国中公麻呂は、のちに出世して造東大寺司の次官となったが、公麻呂こそ、大仏鑄造を成功させた技術者だという。そして豪族たちの寄進もこの十九年ごろからはじまっているが、そのかげには、下積み民衆の汗みどろの労働があった。

⑩雑戸の労役

大仏と伽藍の造営を担当した造東大寺司の官人は、天平宝字三年（七

五九）四月、延べ八千人、実人員二百数十人に達した。かれらは、造仏所・鑄所・木工所・造瓦所などの各事業を分担し、その下に工人・仕丁・雇民・雑戸・奴婢が駆使された。もっとも多いのは仕丁・雇民・雑戸で、天平宝字六年（七六二）四月には仕丁千三百十二人と、雇民千二百六十二人という数字が記録されている。仕丁は二十一歳から六十歳までの成年男子で、全国から徴発されてきたものであり、雇民は労賃を支給されるが、強制労働で、逃亡すると処罰された。ここでは、雑戸がどのように駆使されたかを一見しよう。

天平十六年（七四四）、京畿諸国の鉄工・銅工・金作・甲作・弓削・矢作・梓削・鞍作・馬飼など約七百九十戸と、官奴婢六十人の身分を解放し平民にしてやって、大仏や伽藍の造営に従わせた。これら雑戸が大仏造営にふり向けられたためにかれらが属していた造兵司と鍛冶司が廃止された。

このときの勅は、雑戸や奴婢の身分は、人の恥じるところであるから、平民と同じにしてやるが、本業は続けるようにせよ、もしお前たちの技術を子孫に伝えなかつたら、子孫はもと通り雑戸や奴婢にすると述べている。かれらを造仏に励ますための優遇策であるが、労働力と技術を確保するのがそのねらいである。ところが、天平勝宝四年（七五二）二月になると、これら解放されて平民になったはずの雑戸は、ふたたびもとの通り雑戸の身分にひきもどされ、もちろん本業を続けさせられた。これは大仏開眼（四月）の直前で、大仏がだいたい完成すると何の理由もなしに（二月の勅は何の理由もあげていない）もと通り雑戸とするのは、まったくの政府の気ままな処置であった。

⑪熱烈な天皇の信仰（前略）

七月になって、造営の見通しも一応ついたのであろう。これまで病に耐えてきた聖武天皇は薬師寺にうつり、女性の皇太子阿倍内親王に位をゆずった。孝謙天皇である。光明皇后は、いぜん大きな力をもって宮廷を指導した。（後略）

さきにも言った通り、大仏は八度も鑄直したのちに、天平勝宝元年（七四九）十月に完成した。十二月には聖武上皇、光明皇太后は孝謙天皇とともに東大寺に行幸し、五千人の僧を招いて礼仏、読経をはじめ、唐・渤海・呉の楽を奏し、五節の舞や久米舞を舞わせるといふ大法会を催した。東大寺には封四千戸、奴婢百人を寄進した。銅座の鑄造開始は四年二月で、翌月からはじめられた塗金がまだ終わらない四月九日に、大仏開眼会が行われた。当日のありさまは「仏法東帰より、齋会の儀、未だ嘗て此の如く盛なるは有らざるなり」（仏教が渡来してからこのかた行われた法会の中でも、これほど最大なものではなかったという意味）と記されている。思えば大仏は、天平十五年（七四三）の着手から天平勝宝四年の開眼まで、じつに十年の長い歳月をついやした。また、大仏を造るだけで、熟銅七十三万九千五百六十斤、炭一万八千六百五十六石、その他、水銀だとか練金などもばく大な量を使っている。

東大寺の伽藍一切の造営が完成したのは、延暦二、三年（七八三―七八四）ごろで、前後四十年ほどを費やした。大仏殿の規模は現在（大仏殿は二回焼け、いまのは元禄時代のもの）より基底で二九パーセント、建物は三四パーセント、内陣は五六パーセントだけ大きく、寺地は六町四方を占めた。このような巨大な建物はたえず普請が必要で、平安時代になっても「世の中に、てをの（斧）の音するところは、東大寺と此宮（小野宮、つまり当時の最有力者藤原実頼の屋敷）とこそ待るなれ」と「大鏡」に記されている。（以上引用）

まず、先にあげた大仏造営にかかる数値は、『扶桑略記』よりもこの『日本の歴史』の記述のほうに近い（⑫参照）。『日本の歴史』は、『イアラ』と同様にして『扶桑略記』と違い、白銀・水銀・鍊金の数値を省略している。

また、ここから再び『イアラ』本文に戻れば、本文の意味もより一層明らかになる。以下具体的に見ておく。

その頃諸勢力の対立はなはだしく、皇族と貴族、貴族と僧、そして貴族内での争いと……、目にあまるものがあつたために聖武天皇は力をつにするために万人に呼びかけ、大仏建立に踏みきることにした。だがそのうらには折から隆盛をきわめた仏教に対する敬いの気持ちの他に権力の誇示と文化の粋をこの一つに残そうという考えが含まれていた。（17頁）

この箇所は、引用①および⑧を略記したものと考えてよさそうである。こうして民間に呼びかけ、寄付をつのり人を集め、ついに天平十六年十一月につくりはじめた。しかし、甲賀での大仏建立はうまくいかず、中絶に終わった。やがて天平十七年、平城京で再開のはこびとなった。再開に際し、すべて慎重をきして行われることになった。（17頁）

ここは引用③に対応する箇所で、「十六年十一月」という年月や「甲賀」という地名は史実であるのだから共通することは必然ともいえるが、「中絶」などという言い回しも同じである。「大仏造建」という余り聞きなれない言い方については、『イアラ』でも初出・新書版でここは「大仏造建」という言葉を使っていた箇所である（文庫版以下ではすべて「大仏建立」という言い回しで統一される）。

大和の国、中村に住む国中公麻呂は、先祖を百濟から帰化した鑄造技術者の子孫ですぐれた鑄匠であった。すぐれただけでなくものごとくにいちずのうちこむたちの男だった。こうして大仏建立のための技術者が身分を問わず集められ、公麻呂も呼ばれて宮中が上がった。この大事業にさいし、日夜を通しての意見の交換がなされたことはいまでもなく、ここに、公麻呂の存在は次第に皆の注目を集めていったという。（18頁）

この部分は引用⑩を利用したと言えるだろう。ただし、『イアラ』では、(作者か編集者か)読み間違いをしている。大和の国中村に住むから国中公麻呂なわけだが、「大和の国、中村」に住んでいることになってしまっている。これは六諸本全てが現在まで訂正されていない。

本文にある「逃亡すると罰に処せられるおきてであった。そうして無事任務を果たすと平民にするのきまりだった。」(20頁)や、「なお、奴婢を平民にとり上げてくれるという約束が守られることはなかった。」(41頁)という奴婢への扱いについては、引用⑩の記述を略記したものと考えて良からうと思われる。また、第二話「しるし」の冒頭に引用された「世の中にてをの音するところは東大寺と此宮とこそはべるなれ(大鏡)」(44頁)の文言も引用⑩に拠ったものであろう。

さて、大仏造営にかかる年月を先の『扶桑略記』から今一度確認しておく。すなわち、大仏造営の発案から開眼供養まで十年掛かっている。が、大仏の鑄造自体は二年という短期間で終わっている。

『イアラ』本文には「こうして八度の鑄直しをし、十年の歳月をへて天平勝宝元年に大仏は完成した。」(41頁)とある。これは引用⑩「さきにも言った通り、大仏は八度も鑄直したのちに」および「思えば大仏は、天平十五年(七四三)の着手から天平勝宝四年の開眼まで、じつに十年の長い歳月をついやした。」に対応している。土麻呂と祖母とで「どうせたかだか十年ほどのことじゃ。」「十年！」という会話もあつた(20頁)。「イアラ」本文をそのまま読めば、土麻呂が徵用され大仏が完成するまでに十年掛かっているかのように理解されてしまうだろう。これは端的に言つて、模図が『日本の歴史』を読み違えている、と言える。次に、小菜女が鑄込まれたのは何時なのか。実を言えば私も漠然と、小菜女は大仏開眼会るときに鑄込まれたと理解していた時期があつた。実際、第二話「しるし」では土達は年に一度「大仏の開眼の日」(57頁)に奈良へ帰ってくる、と記されている。が、これは明らかに誤解である。小菜女が鑄込まれたのは最終の鑄込みの時であつて、開眼供養会は

その後に行われているのである。

また、大仏の作り方について。大仏が八度の鑄直しをしたという点についてはどうか。『日本の歴史』を読む限りでは、何度か失敗をしつつ八回にわたつて鑄込んだように読める。極端に言えば、八回目に成功したかのように読めなくもない。いずれにせよ鑄造方法に関する詳細は書かれておらず、分かりにくい。これは、『扶桑略記』の「三ヶ年間、八ヶ度、大仏を鑄奉る。」をどう読解するかにも掛かっているのだろうが、今日では八段階に分けて鑄込みを行った、として定説化している。この点に関しては模図のほうが史実Ⅱ定説に拠っている。つまり模図は、「四年、五年と過ぎ大仏はしだいに形をととのえはじめた。」(35頁)、「大仏は腰から銅にうつりやがて一番むずかしい顔にかかることになつた。」(36頁)と記しており、大仏が段階的に鑄込まれたとして作品化しているのである。

ただし、今日の定説によれば鑄造は、大仏を水平に八分割するやりかたで、台座から上部へ向かつて順次鑄込まれていったという。そして、鑄造の際には、流し込む溶銅の圧力に耐えられるよう、鑄造すべき部位は土中に埋没されており、その土はすべて完成してから取り除かれる。ゆえに、『イアラ』に描かれたような、木組みだけで鑄造作業を行っていたわけではないのである。

### 3、天明の飢饉

『日本の歴史』を典拠としている話は、第一話以外では第五話「うしろい」の冒頭部分があげられる。この箇所は、天明の飢饉を述べたくだりであり、『イアラ』本文には次のようにある。

その時代はふしぎなくらい天変地異があいついで起きたため、人々は、なにかしら目に見えぬものの啓示として恐れ、おののいた。

明和七年から八年にかけての全国的なひでり、翌九年二月の江戸の大  
火。それに加えて全国的な水害。

年号を安永と改めたが天災はおさまるきざしはなかった。安永二年の  
疫病はまたたくうちに広がり、十九万人が死にいたった。さらに京都、  
日向の大洪水。伊豆大島の噴火。さらに翌年には桜島の大噴火。

ついで世にいう天明の大飢きん。さらにかさねて四月から八月に続く  
長雨。その間に浅間山の大爆發があった。

それだけではおさまらず飢きんは諸国にまんえんして大飢きんとなっ  
た。奥州ではさらにひどく、牛、馬の肉はいうに及ばず、犬、猫のたぐ  
いすら、食いつくされてしまった。それどころか、人肉を食う者さえあ  
とをたたく、ひどいところでは村全体が死にたえて、ひとりの生存者も  
いない村さえあった。

それ程までに苦しみあえていたというのに、それに反して武士や町  
人の生活は百姓を犠牲にして爛熟し享樂的になり、生活はさらに華美に  
なっていた。(224〜226頁)

これもさきと同様に『日本の歴史』から連続する箇所を引用しておく。  
第9巻「ゆらぐ封建制」である(63〜65頁)。一つ一つの対応は示さな  
いが、典拠たるは一目瞭然と言えらると思う。

明和九年 めいわくなんとし

しかもこの時代には、不思議なほど天災地変がつづいた。明和七〜八  
年(一七七〇〜七一)には諸国がひでりで苦しめ、翌九年二月には江戸  
に明暦の大火につぐ大火があり、多数の死傷者を出した。この年にはま  
た、諸国は水害におそわれた。そこで年号を安永と改めたものの、天災  
はなおやまず、

年号は安く永くと変れども

諸色(諸物価)高値いまにめいわ(明和)九

と皮肉な落首がつくられるほどの時代であった。

さらに安永二年(一七七三)にははげしい疫病が流行し、十九万人が  
死んだ。下層階級にはびこったこの疫病は、ついに尾張徳川家にもおよ  
び、世継ぎ治休(はるやす)(左近衛中将)が二十一歳で死んだ。そのころの落首に、

御屋敷へ町からうつる疫病は

はじめ中間をはり(尾張)中将

とよまれたほどであった。疫病は、翌年には仙台藩にもひろがった。

また天災では、安永七年(一七七八)、京都・日向(宮崎県)に洪水。  
伊豆大島(東京都)が噴火。八年には桜島(鹿児島県)の大噴火とつづ  
いたのである。

卯年のききん

ついで、世に天明のききんとよばれる大ききんにおそわれた。このき  
きんは、天明二年(一七八二)にはじまり、翌三年になると四月から八  
月にかけて長雨がつづき、そのあいだに、七月には浅間山(長野県)の  
大爆發があったうえ、諸国大ききんとなり、天明六、七年(一七八六〜  
八七)までつづいたのである。こうなると、すべての天変地異の原因を、  
世間は田沼の政治と結びつけて、その悪政の結果だとして、有形無形の  
恨とのろいの声を、田沼父子へ集中してあびせかけていった。浅間山の  
大噴火のときには、こんな落首もよまれた。

砂や振る 神代も聞かぬ田沼川

米くれないに水もふるとは

あさま 浅間しや富士より高き米相場

火の振る江戸に砂の振るとは

このききんは、天明三年(一七八三)が卯年であるところから「卯年  
のききん」といって、後の世まで語り草になった。その惨禍は、生産力  
のひくい東北地方にとくに多大で、仙台藩だけでも天明三年から四年へ  
かけて、十四、五万の者が餓死し、疫病で死んだものを合わせれば三十  
万人におよんだといわれ、南部藩では、餓死者四万余、病死者二万四千、

空家一万余、他所出三千三百人、ウマ二万余頭を失ったという。天明三年の人口が三十五万人というから、餓死・病死者とも全藩人口の二〇パーセントにも達した。また、下野（栃木県）黒羽藩の武士鈴木武助が書いた「農諭」のなかには、その模様が次のように記されている。「関東のうちはまだ大ききんというほどではないが、奥州では飢え死にしたものが多い。食物という食物はなに一つなくなつたので、ウシやウマの肉がもちろん、イヌ・ネコまでも食い尽くしたが、それでももたなくて飢え死にしていった。はなはだしいところでは、二、三十家族も住んでいた村むらや、四、五十戸もあつた里々がみな死にたえ、ひとりとしてのこつたものがなかった。だれがいつ死んだかもわからず、死体は埋めてもないので、鳥けだものえじきとなつた。庭も門も荒れて、一村一里すべてなにもなくなつたところもある。」

このききんのとき、奥州に行つていた高山彦九郎が、山道で道にまよい、とある家を見つけて中にはいつて見たところ、なかには白骨るいるいとして、目も当てられないありさまに、おどろいて逃げ出し、ようやく人里に駆けつけたと、その日記に書いている。東北の百姓は草木の根を食い、あるいは子どもの首を切つて火の上であぶり、頭がい骨のわれ目にハシを入れて、脳みそを食べたというほどの悲惨さである。

また奥州路で、ある人が橋を通つたところ、その下に餓死した死体があり、そのモモの肉を切つて、かごの中へ入れてもつていくものがいた。それをいったい何にするのかときいたところ、これに草葉を混ぜて、イヌの肉だといつて売ると答えたというあさましい話もある。さらに生き残つた者どうしが、殺し合つて食べるというところまで、みじめな姿をあらわした。このようなどきでも「餓死した者は百姓や町人ばかりであつて、役人衆には一人の死者もなかつた」と伝えられている。

『日本の歴史』では、客観的な歴史記述のなかにも狂歌を引用するなど何かしらユーモアをたたえた余裕がうかがわれるが、『イアラ』はそ

れを厳しさと緊張感のみで仕立て直している。

なお、第二話「しるし」、第三話「わび」、第四話「かげろう」には『日本の歴史』を典拠として指摘しうる箇所は、今のところ見当たらない。模図は、取材源・典拠として、同書以外の書物も利用していると思われる。直接の典拠は未だ指摘できないが、原拠等に関して以下で見ておく。

#### 4、千利休

第三話「わび」は、利休と関白秀吉をめぐる時代が舞台である。

土麻呂は、本話では利休の従者としてわび助と呼ばれている。同時に、秀吉の命を受け一人の女性を道楽的に玩ぶための役目を帯びて、細井新助という名の武将である。

細井新助とは何者か。歴史人物辞典の類、『寛政重修諸家譜』、『断家譜』を見ても全く探せない。模図が参看したとは思われないが、桑田忠親『千利休』<sup>7)</sup>に、次のようにある。

それで愈々越中陣が始まると、利休は八月二十二日附けで今度は芝山源内宛に書状（文献十参照）を出してゐる。源内は監物と稱し、利休の高弟として知られてゐる。御陣の様子を承りたいので、細井新助殿の所へ書状を以て申し入れた。いりかやの箱を一つ進上したので、其許より御披露に預りたい。先手の軍の様子を確かに承りたい。御留守は無事で、當方も變りはない。追々飛脚を以て御意を得ることにして、これで筆を擱く、とある。これは、大坂に留守をしたゐた利休が、佐々征伐の先陣を承つて越中に在つた芝山源内に出したものであつて、細井新助といふのは秀吉の武将で、源内は恐らく新助の組に屬してゐたのであらう。

（62頁）

本話には、他にも利休に関する逸話がちりばめられている。利休の自刃については、これも桑田忠親『千利休』によって示しておく。

さて、利休が秀吉の命によつて切腹したのは、天承十九年二月二十八日のことである。彼が堺に蟄居を命ぜられたのは二月十三日のことで、その日故郷の堺に歸り、それから十五日間を堺で過ごしたわけである。この間に木像の磔騒ぎがあつたりして、揚句の果てに切腹といふことになつた。そこで、秀吉の生母の大政所や正室の北政所などは、利休の爲に命乞ひをするから、何とかして關白様に赦罪する様にと、密使を遣はして勧めたが、利休は頑として聞き容れない。それがし天下に名ある者が婦女子の爲に死を免れたとあつては後世の聞えもいかゞと、固くこれを辭し、従容として死に就いたのであつた。まことに水の低きに就くが如き最期であつた。辭世の偈なども實に堂々たるものである。

ジヤンセンチジヤ  
リキキクトツ  
人生七十 力圍希咄  
ワガラノハウケン  
ソフツクセツス  
吾這寶劍 祖佛共殺

提ぐる我具足の一大刀今此の時ぞ天に抛つ(161頁)

この切腹のくだりなど、本話での「天正十九年、二月二十八日……その日は利休ねずみの雨。が降り続いていた……」といった時期の明示、「宗易どの、もう一度大政所のおかたや北政所のおかたにご依頼し、いのち乞いをなされては!」「御女中がたを頼み、いのち乞いはいたさぬ!」(123頁)といった命乞いに関わる会話、辭世の偈「人生七十／力圍希咄／吾這寶劍／祖佛共殺」(126頁)など、十分な対応は見られるが、辭世の偈の振り仮名や二句目の「圍(囲)」と「匣」の文字の違いなど、違いも大きい。

有名な逸話である朝顔の茶湯と野菊の茶湯(ともに155頁)、利休好みの名物の「大黒の長次郎」(127頁)については、『茶話指月集』などのほか桑田『千利休』にも見える。利休の台詞「茶の湯とはただ湯をわ

かし茶をたてて飲むばかりなることと知るべし」(125頁)も、一見して和歌には見えないが、利休百首として今日も知られたものである。

本話巻頭と巻末とに二つの和歌が引かれる。一つは三夕の歌として名高い定家の「見わたせば」の歌であり、一つは家隆の「花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春をみせばや」である。利休の話に新古今集歌人の引用は時代錯誤のようでもあるが、『両歌は紹鷗・利休が好んだ和歌である。南坊宗啓・立山実山『南方録』に次のようにある。

紹鷗、「わび茶の湯の心は、『新古今集』の中の、定家朝臣の歌に、見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまや(苦屋)の秋の夕ぐれこの哥の心にてこそあれ」と申されしと也。(中略)

又、宗易、今一首見出したりとて、常に二首を書き付け信ぜられし也。

同集家隆の歌に、

花をのみ待つらん人に山ざとの雪間の草の春を見せばや

これ又、相加えて得心すべし。(中略)

歌道の心は、子細もあるべけれど、この両首は、紹鷗・利休、茶の道にとり用いらるる心入れを聞き覚え候てしるしおく事也。(下略)

## 5、おくのほそ道

第四話「かげろう」は俳聖芭蕉が登場する。芭蕉に随行する曾良こそが本話においては土麻呂であるが、史実のごとき芭蕉の俳諧の弟子ではなく、旅の途中で二人は初めて出会う。行程は『おくのほそ道』と同じく、行く先々で芭蕉が発句を吟ずるのも同じである。二人は川止めによつて宿泊した旅籠で出会う。具体的に地名は明記されていないが、前後に示された地名を見ると、黒羽・白坂・白河を越え、二本松・福島・飯坂・白石・仙台への路の手前であることが明示されている。ならばこの川は阿武隈川と見なしてよい。なお、川を渡る以前、白河の関の前の場面で、

野中に馬を連れた二人の子どもと土麻呂は出会う。聞けば、美しい女人を馬に乗せそのお札に鈴とお金をもらった、という。些細なシーンだが、ここは『おくのほそ道』の黒羽の場面を利用しているのである。『おくのほそ道』は次の通りであるが、この段階ではまさに小菜女Ⅱ芭蕉なのである。

農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず、「いかゞすべきや、されども此野は縦横にわかれて、うゐ／＼敷旅人の道ふみたがえん、あやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し給へ」とかし侍ぬ。ちひさき者ふたり馬の跡したひてはしる。独は小姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良

さて本話にも注釈的には幾つかおかしな点もあるが<sup>1)</sup>、小菜女と思しき女性が吟じたと思われた「行く春や」「あらたうと」等の発句が実は芭蕉の吟句であり、フィクションがすべて史実に回収されるという意味で、最も落ち着いた物語である。

## 6、典拠論の射程

典拠論や注釈という方法は、いささかサディスティックな方法である。本年度の「文学2」で『イアラ』を講義し上述の典拠を披瀝したが、学生達の反応は頗る悪かった。毎時間書かせた授業の感想には、受講生の約半分は「作者がいろいろ取材しているのが分かって面白かった」式の教員へのお世辞とも取れる感想もあったが、棋図ファンの私（教員の私としてでなく）にそうした意見は、「大仏の本当の作られ方が分かって面白かった」といったまるでの外れな感想と同様、『イアラ』に対する

無関心のなせる業とも思えた。『イアラ』にも興味を持ち、同時にこうした典型的な国文学研究の手法にたいする率直な賛辞を寄せた学生は2〜3人しかいなかった。そして、残りの約半分以上は『イアラ』に積極的に興味を持った読者によると思われる、同時にクリエイターを目指す若者達には、おそらく直観的にもこうした研究手法は嫌悪されるのである。一行二行で反感を示した感想が多い中、ここではすこしまとまった記述がなされているものを、本人の承諾の下に紹介する。

文学の授業で、高橋先生の論文で、一つ一つのシーンを暴いてゆくことに感動は色あせてゆく。これはすごく反芸術的というか、破壊。

フィクションをノンフィクションの土俵にひきずり出して検分する。作品ではなくなる。授業が終わった後、僕の人生から「イアラ」という作品がうばわれているのだろうか。それとも、それでもまた作品として生きつづけるだろうか。

この授業は「イアラ」という作品に、何か深みのようなものを与えるのか。僕と「イアラ」の関係に、何かを、何を、もたらすのか。わからない。本当にさっぱり。

でも、授業なので、僕には単位が必要なので、この授業を選択してしまったので、（原拠論以外が感じる部分もあるし）、僕はこの疑問をテーマとして取り組みます。

特に！原拠論は本当にナンセンス・野暮の極みだと思う。（別にケンを売っているわけではありません）この野暮な、芸術殺しのようなことを一体なぜ高橋先生が（人生をかけて）やっているのかを見極めることを目標として。

本当に敵意はありません。生意気ですが正直なのです。怒らないでください。  
秋吉和城

言葉が無い。全くその通りである。典拠論は「芸術殺し」にしかなら

ない（その途しかないように思われる）のはなぜなのか。かつて水木しげる『悪魔くん』の典拠論を書いた際には<sup>12</sup>何の後ろめたさも後味の悪さも残らなかつた。理由はいろいろあるが、根底には水木しげるもその作品も特に好きではないということがある。身内の不幸は辛く他人のそれは幸福みたいな手前勝手な話だが、しかし学問とはそんなものなのかと思えばすこしうそ寒くなる。

もし『イアラ』の典拠を調べ、単純に、歴史学の最先端を熟知しそれを作品へと昇華しているような事態が描き出せたらば、私も秋吉君も、こんな風に憤らずに済んだであろうか。いや、そうであつたとしても、オリジナルな『イアラ』の歴史観を云々するような事態を描き出せたとしても、やはりそれは借り物であつたという、一抹の悔恨は残つてしまふのではないか。そして、もしそうだったとしても、『イアラ』の良さがそんなところにあるとは私も思っていない。

私にとって図様典拠論の意義とは次の二点に集約される。すなわち、『イアラ』はこうした無粋で野暮の極みたる典拠指摘を経てもなお名作でありつづける、ということを書き記述して行くこと。『イアラ』が名作であるのは、こうした典拠が隠蔽されたままであるが故でなく、それが顕現されてもなお、決して色あせる事は無く、あらゆる読解にたえうる作品であることを論述すること、これである。そのためにも、典拠の指摘は私自身がまずやらねばならないのである。

もう一点は、そもそも典拠と言えども、それが作品化され、すなわち作品と一つのものになるものになる時は、完全に作品に同化されているということである。「テキストを読むという行為は、背後のテキスト以前の世界との相補の関係が明瞭になつてはじめて完結すると考える必要はないと思われるのである。（中略）読者は、既知のことばから未知のことばへと進むのであつて、典拠を必要としない読者を考えることは十分可能なのである。」（稲田篤信）<sup>13</sup>、ということ。

私が私の『イアラ』に対して敵と見るのは、典拠論それ自体ではなく、

本作を、面白くないとか意味不明だとか、解説文だけで進行しているだとか、断罪の態度である（実際にそういう感想を述べたサイトなどはある。ただし凡庸な賛辞よりは有意義だろう）。私の、そして図様の『イアラ』は、オマエが知らないような典拠が明かされてもなお、こんなに名作なのだ！と、いささか口汚い言い様になつてしまつたが、まあそういう事を（ちゃんと上品に）言いたいのである。

ある作品を面白いと思うか否かそれを発言するか否か、これは思想の自由であり言論の自由であり、絶対に保障されるべき権利である。バカは発言するな、などという事は決して認められないし、無知は悪徳とも言えない。自らの「既知のことばから未知のことば」を読めば良いのである。各々が言葉を以つて自分の責任で対象の好悪・是非を言うことは自由である。必要なのは有用性である<sup>14</sup>。

## 7、『イアラ』の世界は可能世界なのか。

パラレルワールド

『イアラ』には、すでに一般に言われてきた、ストーリー的な破綻がいくつもある。典型的なものとしては、第二話に出てくる土達は土麻呂の子孫のような描かれ方をしているのに、第三話以後に出てくるわび助・曾良などは、歳をとることがない土麻呂その人である、という点。あるいは、小菜女のほくろの位置の違い、すなわち第二話では左腕にあつたが（77頁）、第七話では左乳房の上にある（278頁）など。私はこれらは、さほど気にならなかつた。作品の設定変更など、作者の息遣いがそのまま感じられるし、瑣末な齟齬などあげつらつてみても意味が無いからである（有効な読解に繋がらない、ということ）。しかし、典拠を指摘し、かつ細々注釈をつけていけばいくほど、こうした齟齬が増えてくるように思われるのも、確かに事実なのである。

『イアラ』には他にも些細な齟齬がある。誤植など、作品に直接関わるとは思えない単純なミスについては、編集者の仕事である。作者に知

らせた上で直せば良いし、直したほうが良いと思う。例を示せば、第一話「さなめ」に引かれた日本武尊の思国歌は、諸版でそれぞれ、初出「大和は国のまほらまたたなずく」、新書「大和は国のまほろばたなずく」、文庫以下「大和は国のまほろばたなづく」と直してきているものの、続く「青垣こもれる」はそのままである。「青垣山隠(籠)れる」が正しい。また、「まほらま」も『日本書紀』での訓みであり間違いではない。第二話「しるし」に土達の言葉としてある「アラヒウケンソワカ」(73頁)は、彼がまともな山伏であるなら「アビラウケンソワカ」と直していいだろう。第四話「かげろう」では、立石寺での名句は、初出では正しく「閑(しずか)さや」なのに、新書版で「閑(しずけ)さや」に改竄され、文庫版で元に戻るも、愛蔵版以後現行三版は「閑(しずけ)さや」に逆戻りである。金沢での吟「難面(つれなく)も」の句も、全版で「難句(つれなく)も」にしているが、今はその表記は採らない。第五話「うつろい」においては、「津椰姫」「津椰姫」の二種類の表記が混在している。

しかし、例えば次のような齟齬は、単純に直せば良いのかどうか、判断に苦しむところである。例えば、「イアラ」という言葉はどの經典にも出ていない、と土麻呂は言う(82頁)。が、無理矢理こじつければ、『大般若経』三六九巻の一節「一來果道異不還向道異不還果道異阿羅漢向道異阿羅漢果道異獨覺道異如來道異」や「應得阿羅漢果者以阿羅漢果法而安立之」など經典にある言葉とも言える(意味はともかく)。第四話では、土麻呂と芭蕉は、汐越の松(現福井県金津町吉崎。なお訓みはシオゴシであるべき)を賞でた後に「こうして私と老人は金沢へ……」とあるが、日本海を再び東上したのか。あるいは、二人が旅する日本は吉崎の西に金沢(石川県)がある日本なのか。金沢を伊勢に直せば済むのだが、それで良いのか。

これらの錯誤は、編集者や研究者の仕事だと割り切って、厳密な本文校訂を行って直していけば良いのだろうか。それが仕事であり学問とい

うものでもある。一般に本文校訂は、作品の意味的自立や作者の意図の再現といった前提の元になされるが、作品『イアラ』の意味的自立はある意味で読者の中にかかないし、他方、楳図自身の作者の意図も決して自明なものではない(読解においてしか作者の意図は成立し得ない。あるいは作者の意図は(錯誤も含んだ)本文の中でしか成立しない。たとえば、作者が後に作品を自らの言葉で解説しようとも。そして、それが錯誤か否かも自明ではない)。

他方で、本文校訂において一切の予見を容れず、原体を保持するという立場もある。しかし、その結果、意味的自立が不能になってしまうのは、テキストにとっても不幸とも言える。揚句の果ては、駄作であるというレッテルが貼られる(そもそも原体では意味不明だから本文校訂されるのである)。

ここに要請されるのは、そうした本文校訂的な物理主義を一挙に乗り越える視座であろう。が、典拠論や注釈によって『イアラ』に傷を負わせつつ大見得を切ってみたものの、こちらにはこれ以上の用意がない。

小菜女と土麻呂が出合った世界は、我々が今生きている日本とは別の世界なのだろうか。一〇年掛かって鑄造された東大寺大仏には小菜女が鑄込まれており、その折に「イアラ」と叫んだ世界は、あるいは、吉崎よりも金沢が西にある世界は、我々が住むこの世界とは別の世界なのだろうか。すなわち、『イアラ』の世界は可能世界パラレルワールドなのであるか。

しかし、そもそも考えて見れば、我々はフィクションとノンフィクションとを区別したりはするものの、作品世界と現実世界とを、あきらかに区別している。ノンフィクションでさえも、それをノンフィクションというフィクションであると自明視している(それが芸術と見なされる限りにおいて)。相互に可能世界なのである。この自明視は、芸術世界の自立を保障する反面で、芸術の現実へ関与の力を無力化する(私は、現実に対して無関係または従属することで保障される芸術至上主義よりも、現実と入り混じっている世界「ロマネスクに生きる人間」(A・テ

ボーデ)が良いと思っっている)。

世界のすべてを知ることができない以上、つじつまがあつていらないとかを云々するのは、本質的に無意味なのではないか。世界は因果によつては決して成立しておらず、つねに不整合なのではないか。そしてその不整合を最終的に解決するのは、それぞれに共可能としてつじつまの合った複数の可能世界ではなく、一つしかないにも関わらず、不共可能であるこの一つの世界だけなのではないだろうか。

通常、歴史に取材した作品において、史実と異なる物語を展開するにしても、一定のつじつまは合つていことが前提とされている。例えば、義経が平泉で死なずにモンゴルに渡つたとする物語は肯定されても、単純に一度死んだ者が、何のことわりもなしに生きていたことにはしない。そうした場合、常にその理由は作中のどこかで説明される。

しかし、思えば『イアラ』とは、奈良時代に生まれた男が、太陽が赤色巨星となつて地球を包み込むその日まで死ぬことなく生きている話であつた。この土麻呂という男がなぜ不死なのか、作中に明確にその理由は与えられていない。

なぜ土麻呂は死ぬことのない存在になつたのか。それに対する回答は、およそ無意味で無粋な詮索にならざるをえないだろう。模図作品に描かれた事態の原因を云々することで終始する読解くらい下らないものは無い。だが、あえてここで、その回答を試みて、いささか中途半端ではあるが、本稿のとりあえずの結末としたい。

## 8、言葉と反復する出来事

第一話には、牢獄に繋がれた土麻呂が偶然小菜女を目にして、「土麻呂から時間のながれが完全にとまったのもその時からだつた。土麻呂の頭の中にはあの時見た小菜女そっくりの姿だけがやきついてはなれなかつた。」(32頁)というナレーションがある。「時間のながれが完全

にとまった」とは極めて示唆的な言葉ではある。無時間とは永遠そのものである。が、本当に「時間のながれが完全にとまった」のは、やはり生贄となる小菜女の「イアラ」という言葉を聞いたその時であろう。小菜女の言葉「イアラ」は、土麻呂との別れという出来事を、反復に変える呪文である。「イアラ」という言葉に意味は無い。ただ言葉だけが出来事を反復に変えるのである。土麻呂の反復とはもちろん、永遠の時間の中で小菜女を追い求めることであり、小菜女に似た女に出会うことである。

『イアラ』は、次のようなナレーションで始まつていた。それは「くり返し」を語るものである。

なぜ、そのようなものが生まれたかは知らない。

こんとんとしたうずの中にそれはいつのまにか形づくられていた。

はじめはものいわぬかたまりであつた……だが……

くり返され、なおもくり返される試練に、あるいは残され滅ぼされたりもしながら、そこに目に見えぬいぶきがしだいにいきづいていった。

土あるところに花は咲いたが、それはあくまで自然の摂理に従わねばならなかつた。冬が来ると枯れ、やがて春がくると再び別のところから芽をふいた。

同じことをくり返しながらそれは少しづつ形を変えていった。形を変えるために、くり返しはあつたのかもしれない。

中には何ら形を変えることのないものもあつた。(5～11頁)

「そのようなもの」が何を指すのかは必ずしも分からない。しかし、それは「はじめはものいわぬかたまり」であつたが、ものをいうことつまり言語を持った時に反復が始まるのである。

反復する出来事。反復には同一性が要求されるが、その同一性を保証するものは出来事に内在しない。なぜなら、出来事とは常に一回性しか

持たないからである。しかし、我々は通常、出来事が反復すると理解している。これは言葉の働きに拠るのである。

「もし出来事エラニヤという語が、かけがえのない、取り返しのできない経験的な唯一性を意味するのだとすれば、記号は決して出来事ではない。たった「一度」しか生じないような記号は、記号ではないだろう。まったくの特有語イデオムであるような記号は、記号ではないだろう。」(J・デリダ)<sup>15</sup>。  
 デリダが言う記号とは言語のことである。取り返しの利かない唯一の出来事⇨生贄に、反復を与えたのは「イアラ」という言葉である。そして、言葉による反復によって、土麻呂は永遠・無限という世界に墮とされてしまったのである。「何ら形を変えることのないもの」とは、土麻呂であると同時に「イアラ」という言葉であり、その働きである。そう考えれば、『イアラ』は永遠の愛の物語などというロマンティックなものには決して収まらず、むしろその永遠を回避し永遠からの解脱を試みた物語だということになるのではないだろうか。利休や芭蕉に仮託された、煤図の反復の思想も、これとは無関係ではありえない。しかし、もう少し考えてみたい。

注

- 1 副田義也「男の時間、女の時間」(文庫版『イアラ』解説)。なお、第二話に見える勾玉は、楽器のように音がし「たまゆら」と呼ばれている。「たまゆら」の語の意味するところは「瞬間」であり、勾玉を意味することは一般には無い。
- 2 『イアラ』には初出以下次の全六諸版がある。本稿でこれらに言及する際には各々末尾丸括弧で示した略記に従う。諸版に絵の改稿・補筆は無いが、ネームに若干の改変が見られる。  
 一九七〇年刊 小学館『ビッグコミック』隔週刊(初出)  
 一九七四年刊 小学館『ゴールデンコミックス』『イアラ』新書判全6冊(新書版)

- 一九八〇年刊 小学館文庫『イアラ』文庫判全5冊(文庫版)
- 一九八四年刊 小学館・豪華愛蔵版 菊判上製全1冊(愛蔵版)
- 二〇〇二年刊 小学館文庫 文庫判全1冊(新文庫版)
- 二〇〇四年刊 小学館 愛蔵版A5判並製全2冊(新愛蔵版)
- 引用にあたっては、二〇〇二年刊小学館文庫版に拠る。仮名漢字の区別は底本通りとするが、振り仮名は適宜省略する。改行、コマの別は再現・明示せず、文意を付度して句読点を適宜補っている。
- 3 第一話における二人の出合いは、オリジナルなもの、個別のかつ具体的な起原である。これは同じく転生の物語として類型視可能な、例えば起原性を持たない伊藤潤二『富江』と比べても、その差異は明らかである。
- 4 『扶桑略記』史籍集覧。通記第一『校本扶桑略記鈔本』(書き下し文にし、丸括弧で語句を補った)。
- 5 読売新聞社『日本の歴史』全12巻。編集委員・執筆代表者、岡田章雄、豊田武、和歌森太郎。昭和三四年。
- 6 例えば、吉川弘文館『國史大辭典』「東大寺」の項。
- 7 桑田忠親『千利休』(青磁社・昭和十七年刊)。「文献十」は同書320頁に翻刻あり。
- 8 これはもちろん、北原白秋「城ヶ島の雨」の歌詞「雨はふるふる、城ヶ島の海に、利休鼠の雨はふる」からであろう。
- 9 「茶話指月集」平凡社・東洋文庫『日本の茶書2』所収。
- 10 「南方録」平凡社・東洋文庫『日本の茶書1』所収。
- 11 本文で述べた金沢の位置。および小菜女かと思われた遊女の髪型など。横長に張り出した灯籠髷であるが、これは明和・安永期の遊女に流行した髪型であって、元祿遊女の髪型ではない。なお、芭蕉が奥の細道の旅程の末に大坂で没したとする本話の設定は、虚構の手法の埒内として許容されてよいだろう。
- 12 拙稿「悪魔くん、認識論的な救世主」(『ユリイカ』二〇〇五年九月号)
- 13 稲田篤信「典拠とテキスト」(『日本文学』一九八二年三月号)
- 14 イアラ論として、中野晴行「解説・怪説・壊説——言葉には呪詛がある」(新愛蔵版解説)の「全体を夢と妄想によってつながれた巨大なループ構造

「言葉と時間の物語」というアイディアには賛同しないが、「言葉と時間の物語」という指摘は秀逸であり、大変参考になった。木村久「世界には奇蹟しかおこらない」（カワデ夢ムック『文藝別冊 棋図かずお』河出書房新社・二〇〇四）の「不死なるもの」への指摘も秀逸と思う。

15

J・デリダ『声と現象』（林好雄訳・ちくま学芸文庫・113頁）。デリダは、フッサール現象学の根本理念たる意識の自明性を脱構築する際、フッサールが依拠した、実在を表象しそれを伝達する言語と意識内における非伝達的な純然たる表象との区別が成り立たないことを指摘した。「ところが言語においては、表象Ⅱ代理と実在を厳密に区別することは原理的に不可能だという単純な理由によって、当然のことながら、両者は時にくついたり離れたりするようなものではないと考えられるのである。しかも、おそらく、そういうことが言語において生じると言うにはおよばない。言語は一般に、そういうことなのである。ただ言語だけがそうなのである。」（114頁）。端的に言えば「対象や意味の自己同一性があるために反復可能性が生じるのではなく、語の反復可能性故に対象や意味の自己同一性が錯視されるのである。」（丸山圭三郎『生命と過剰』河出書房新社・一九八七・83頁）ということである。

（たかはし・あきひこ 近世国文学）

（二〇〇六年一〇月三十一日受理）